

## P-16 protomap を用いた天疱瘡の病原因抗体による発現分子の解析

◎山口麻里<sup>1)</sup>、青山裕美<sup>1)</sup>、藤井一恭<sup>1)</sup>、近藤 格<sup>2)</sup>、岩月啓氏<sup>1)</sup>

1) 岡山大学皮膚科、2) 国立がん研究センター研究所

尋常性天疱瘡は皮膚表皮細胞間のデスモソーム形成に関わるデスモグレイン3に対する自己抗体により全身の皮膚粘膜に水疱を来す自己免疫性疾患である。これまでに天疱瘡抗体には病原因抗体と非病原因抗体があること、天疱瘡抗体刺激により p38MAPK や RhoA などを介したシグナル経路を介して細胞骨格に変化が生じること、Dsg3 欠損デスモソームが形成され棘融解することが明らかにされている。われわれは、病原因シグナルをさらに解析する目的で、プロテオーム解析を行った。方法：培養表皮細胞を病原因モノクローナル抗体(mAb)AK23 と非病原因性 mAbAK20 で刺激後可溶化し、1D ゲルで分離後分子量ごとにゲルを切り出し、消化後 protomap でプロテオーム解析を行った。AK23、AK20 それぞれに分子の増減がみられ、コントロール(無処理)と比べ AK23 刺激後に変化が現れる分子として47種、AK20 刺激後に発現が変化したタンパク質として37種の分子を同定した。それらの中には細胞接着分子、細胞周期調節分子、ユビキチン化に関連する分子などこれまでの報告では Dsg のシグナルや天疱瘡の

病態との関連が報告されていないものが多く含まれていた。現在、ウェスタンブロットで発現の変化を確認し、機能的な解析を進めている。